2015. 10. 24

縮小社会に向けて—農業労働の現状と将来

青野　豊一

今後の縮小社会では、経済活動が縮小するのであるから、仕事が減ることになる。そして就職先も当然減ることが予想される。人口が減少している現状からしても、需要が減るのだから、このことははっきりと納得されるであろう。そこで、個々人の仕事量を減らして、その減少した仕事を他の人たちと分け合う(ワークシェア)ことを社会的システムとして導入しなくてはならない。そして、当然のこととして、賃金も低額となるであろうことが予想される。

そのため、低賃金でも生きていけるようにするには、都会から農村へと帰農して農的生活を基本としなくてはならないであろう。仕事を分け合うことで生じる時間を利用して、農業労働をして生産物を自ら作り出さなくてはならないことが予想される。あるいは、これに関連する仕事を二つ目の生業としてしなくてはならないであろう。

このような事態になった時、人の生活や日々の労働の仕方や人と人の関係が、つまり人間存在の在り方が今とは違ったものとなっていなくてはならない。

1. 農業は、天候次第　受苦的労働である。

人間は、自然に対しては、あくまでも受動なのだ。働くとは、自然や社会の動向に従いつつ主体性を発揮するということである。まずは、しんどさをそのまま、それなりに受け入れることが必要なのではあるまいか。自然を征服して、無限の発展を夢見ることが大きな間違いであって、日々の暮らしは、それなりの苦痛をともなうものであっていいのではなかろうか。パラダイスを夢見て、それに浸っていてはいけない。

現在は、会社や工場での労働が分業化・細分化が徹底化されている。そのために、個々人にとっては単純な繰返し作業になり、肉体的にも精神的にも苦痛な砂を噛むようなものとなっている。そこで、私たちが構想する縮小社会では、労働が人の成長に寄与し、楽しみとなる社会でありたいものだが、・・・。こういう想いで未来社会を構想すると、総合的な労働としての農業に関わることが、理想とするそれに一番近いと思えるようだが、・・・。

農業労働は天候等の自然条件に大きく影響されるから、それに対応していくという日々の課題を生産者に迫ることとなる。課題に立ち向かうには、経験、熟練、そして創造性が必要である。人は、日々を自覚的に生きていくことができる。このような過程を通して、自らの成長と日々の労働が楽しみになるかもしれない。

だが、これは未来社会の理想像として言えるかもしれないが、繰り返すが、労働は楽しい事ばかりではない。それは間違いない。そして、それは、受動的・強制的であることのためであることが多い。他の人に使われていない自営の農業としても、しなくてはならない日々のしんどい労働がある。自営農業は、人に使われることはないが、自然と消費者の動向にきつく厳しく強要されている。酷暑の炎天下に、田に出なくてはならないことも多々ある。具体労働をしないことやバカンスばかりを夢見たのでは、・・・。そんな社会なんて未来永劫存在しないであろう。でも、人は、これを望む。しかしながら、バラ色の人生を思い描くが、石油が枯渇に近づく低エネルギー社会では、しんどい労働をしなくてはならないであろう。今よりもっとしないと、単位当たりの生産量は、激減することが予想される。これは、覚悟しなくてはならない。石油という文明の資源を利用できないのだから、個人的にはそれなりのしんどい労働をしなくてはならない。

＊この働くという人間の営為については、補説２を参照していただきたい。

2. 大規模農業や集団農業は、広がっているか? 農事法人は成功しているか?

日本のモンスーン気候による米作りを中心とした農業では、水の管理が大切な労働となる。これを大規模農業で、そして農事法人の労働者たちが担えるのであろうか。結論からして言えるのは、無

理であるということだ。農地整理をして同一の水利でできるようになっても、無理であろう。田への水の取り入れと排水は、簡単にはできない。それに天候によって、さらに田の土の質によって、一枚一枚工夫しなくてはならないのだから。このような管理(集約的農業労働)のできる規模を越えては、労を多くしても収穫は少ない。

でも、機械と化学肥料と農薬を使って、大きな平野で米作り(粗放農業で)をすればできるであろうと政府は言っている。このようなことは、安価な石油があり、人家のほぼないような地では、農薬の空中散布のできる土地では、そして水利に苦労しなくてもいいところでは成立するであろう。一反あたりの収量が少なくても、経営が成立するであろう。しかし、石油生産量が今後急激に減っていくことが予想されるなかでは、このような石油をじゃぶじゃぶ使う農業は、もう長くは続かない。

それに、農業法人内では、集団農業では、どうしても、一生懸命する人としない人に分かれてしまう。それに、水利を巡る周辺農家と対立が生じる。そのために、内部対立して組織が崩壊する可能性が高い。やはり、モンスーン気候での米作りを中心とした農業では、個別の家族経営という単位でしか、難しいと思われる。私の近所でも、大きな農業機械を使って粗放農業をしている人はいるが、一反あたり二俵程度では、まったく採算が合わない。政府は大規模農業を推奨してきたが、それが成功しているようには、とても思えない。

日本の、特に西日本の気候では、機械と化学肥料と農薬を使って粗放農業をしようとしても、この気候ゆえに土地条件ゆえに、難しい問題がある。例えば、草と虫と菌の繁殖という問題がある。夏は、草を刈っても 2 週間でそれまでの労働を無にする。広い平地で隣の田との境がコンクリート畔なら法面の草刈りをしなくてもよい。しかし、田にヒエやいろんな草がどうしても生える。草の種は飛んでくる。用水に混じり入ってくる。除草剤を散布しても、生えてくる。それを取り除かないでいると、次の年は、さらにもっとたくさん生えてくる。数年で、稲刈りをしているのか、草を刈り取っているのか分からないようになってしまう。そうならないためには、炎天下に田に入り、この雑草を取り除くということをしなくてはならないのだ。集約農業をしなくてはならないことになる。つまり、広い面積の田の管理は、とてもできないのだ。私の近所で大きな農業機械を使って粗放農業をしている人の田は、雑草が一面に生えている。こんなことを隣の田でされると、たまったものではない。

＊虫と菌の繁殖については、省略する。

さらにもう一つ言うならば、例えば、ジャガイモは、北海道では年一回の収穫だが、この辺りでは年二回の収穫、そして九州の島では年三回も収穫できる。こうなると、広い面積は必要ないし、このような集約農業の程度を越えた田畑は管理できないのだ。

しかし、ある作物(例えば、ニンジンとか白菜、キャベツ等)に限定してならば、商品作物の栽培に特化することで、それができ得る条件のある土地では、成立するであろう。この作物を商品として販売して、その得た金銭で米や他の野菜を購入して生活することは、あり得る。このようなことは、もうされている。しかしこれは、農業と言うより、機械と化学肥料と農薬を多用した農産物生産会社である。でも、この形態で大成功したという話は聞こえてこない。皆、四苦八苦しているようである。

虫と菌と草は、どうしても繁殖する。繰り返し除草剤や虫と菌を殺す農薬を散布しないと、すぐ減収や全滅の事態となる。そのたびに、農家の人は農薬が全身にかかっている。消費者が一年間に体内に取り入れる農薬を、一度の農薬散布で摂取してしまっている。

それに、このような土地は、このような特定の作物以外には適していないことが多い。このことを忘れて、一方的に賛美されては困ったこととなる。例えば、「鳴門金時」というサツマシモをたくさん生産している地はこの作物に適した土地(砂地)であるが、他の作物栽培には適していない土地なのだ。作られる作物は、限られている。

このような条件の違いを無視して、日本農業の在り方を論じても仕方がない。それに、先に書いたように、多くの人たちが大都会での貨幣経済に基づく生活から離脱して農的生活を始めると、縮小社会で、このような商品作物が今のように販売できるとはとても思えない。

香川のような人家が多いところでは、私の住んでいる小さな山の谷間の土地では、水利が入り組

んでいて、土地所有関係が複雑な地では、このような規模を拡大した農業経営は成立しない。できる条件がない。でも、これはマイナス条件ではない。作ろうと思えば、いろんな作物を栽培できる土地なのだから、・・・。

日本の農業をつぶしてきたのは自国の政府であることを、忘れてはならない。

政府やそれを推進してきた官僚たちの多くは、日本の農業の実態を知らないのだ。いやいや、日本の農業を守り育てるつもりが初めからない。少しずつ、少しずつ、農業をつぶすことをしてきたのが、日本政府であり、自民党の政治家たちであり、農林官僚たちなのだ。

3. 縮小社会の農業は、女の人も、農業労働の担い手でなくてはならない。

石油が枯渇に近づく低エネルギー社会では、しんどい労働をしなくてはならないであろう。今よりもっとしないと、単位当たりの生産量は、激減することが予想される。では、どうしたらよいのか。まず考えられることは、家族農業では、女の人も、進んで農業労働の担い手でなくてはならない、ということだ。男＋女のペアで、夫婦で働くと、一人でするよりも 3 人前にも 4 人前の仕事ができる。それが、一人では、3 の半分の 1.5 にはとてもならない。1.0 にもならないことが多い。0.8 できればよい程度となる。それに家庭内のいろんな雑事をしていると、0.5 にもならないことが、よくある。

だから、農業労働では、女も肉体労働を担わなくてはならない。これを覚悟しなくてはならないのが、縮小社会であろう。自分たちの生活に必要な物は、自分で作り出すという基本的なことができなくてはならない。

それなのに、現状では、具体的農業労働を避けようする風潮が強い。特に、女性に、この風潮が露骨にある。農業をしている人と結婚したのに、一度も田畑に出てこない人もいる。このような女では、どうにもならない。消費生活にどっぷりと浸かったこの意識を変革しなくてはならない。しかし、これを変えていくことは、難しい。どのようにしたらよいのであろうか。

4. 農業労働は、「能力」差がストレートには現れ出ない。

『社会運動』」(発行　市民セクター政策機構、発売　インスクリプト　No.416　2015 年 1 月号)に、大阪府豊能郡能勢町にある「能勢農場」の寺本陽一郎氏が、「自然の前には人間の能力差はちっぽけだ」という題で文章を書いている。

①現代社会における能力差とは?

現代社会での「能力」差としては、その人のもっている文化水準と教育レベルで測られていると言えよう。そのレベルに達していない者には、貧困でも、差別されても仕方がないではないか、とされている。これが、貧しさのために、差別故に教育が受けられなくても、そのようなことは、スパッと無視して配慮などしない。これが、新自由主義経済体制での「能力」なのだ。今の政府が言っている教育内容なのだ。人格の形成や生きいく上で必要な技術の習得など、どうでもよいとしている。これは、極めて偏った教育なのだが、そんなことなどどうでもよいとするのが、今の教育システムである。そして、この偏った高等教育を受けていない者や学歴の低い者は貧しくても当然、とされている。

＊このことについても、補説 2 で詳しく書いている。

しかし、このようなことが建前として、そしてマスコミ等で盛んに言われても、その実、例えば就職や昇進等では人脈と金脈で、裏でこっそりと決定されることが多々ある。公務員や大企業の場合、今もこれが堂々とまかり通っている。そして、田舎社会では、このようなことは当たり前のこととして今も通用している。

②人間の能力差はちっぽけなものである。

農業労働では、教育や文化水準等の(能力)差や人脈と金脈等によるものは、そんなに大きな違いとなって現れ出ない。一生懸命に人の何倍も働いても、自然条件には勝てない。その地に向いている作物や品種を栽培しないと、収穫はなかなか難しい。また、一度の台風で、作物の収穫は激減する。こうなると、今まで農作業を頑張ることをしていなかった人と、同じ事になる。必死になって災害からの修復作業をしても、大きな差は発生しない。

さらに、同じ品種を植えても、例えば稲の植え付け時期で、収量と品質の差ができる。穂が出て実

がふくらみかける時期が今年の夏のような猛暑になると、高温障害が出て品質が最低ランクになったりする。田植えが 10 日か 15 日異なるだけで、大きな差ができる。このようなことになることを事前に予期できる人はいない。天気予報は、当てにならないのだから、・・・。このような現実の前では、人の能力や努力による差は、ちっぽけなのだ。

また、如何なる作物でも、その生育には時間がかかる。一つの作業では、その成果がでない。時間が、ゆっくり流れているのだから、・・・。結果が数字や金銭となって現れ出るのは来年かもしれない。有機肥料を土に混ぜても、その成果はすぐには現れない。3 年程度後のこともある。それに、虫と菌や鳥や猪そしてサルにやられてしまい、その成果がまったくでないことも多々あるのだ。

つまり、収穫を目指して一生懸命働いても、その結果が良いことになるとは限らない。自然は、複雑なのだ。最後は、その土地の地力と作物のもっている生命力に頼るしかないこととなる。

5. 生存に関わるセーフティネットが整備されていなくてはならない。

だから、言葉としては誤解を招くかもしれないが、ストレートな言い方として、さぼることも、大切であろう。肉体と精神を酷使して働かなくても生きていける社会システムにしなくてはならない。生存に関わるセーフティネットが整備されていなくてはならない。富の再分配ができ得る社会的システムの構築を、収奪・再分配を行う国家行政機関、つまり政府がしなくてはならない。そうしないと、過重労働で、・・・戦前や江戸時代のような悲惨な労働実態、そして餓死ということにまでなりかねないこととなる。

また、個人的にも、日常生活に必要な物は、貨幣による商品交換以外の別の方法(市場経済)で入手できるシステムがそれなりの機能を発揮するようになっていなくてはならない。これは、互酬制の有効活用と言える。このような、物の互酬交換を通した人間関係を再評価して、新しく創り出すことであろう。

でも、この互酬制の賛美はよくない。この交換関係には、毒がある。このことを、私は、事あるごとに言ってきた。研究会で、これを賛美する言動に対して、そのたびに、批判してきた。賛美している人たちは、互酬の毒の実態を知らずに今まで生きてきたように思える。

だから、①互酬交換関係と②市場経済と、③収奪・再分配を行う国家行政機関(政府)が生存に関わるセーフティネットの整備という、この三つのバランスを図ることが大切なことになるであろう。繰り返すが、現在と異なるユートピアを夢見ても、そのような社会など到来しないであろう。この三つの交換システムの相互抑制を通してよりましな社会にしていくことしかあるまい。その時、貨幣によって市場で商品交換をする関係は、今より縮小していなくてはならないであろう。

縮小社会での農的生活では貨幣収入が減るが、でも、生活で日々の食べる物に困るということにはならない。「銭はなくても、物はある」生活となるであろう。

補説 1　人間であるが故の根源悪

再度いう。成長・発展と言うお題目を捨て去ること、これが大切なのではあるまいか。労働とは、受苦的であることを、そのまま受け入れることで、成長ばかり目指さないで、・・・。そして、適当にさぼりつつ、・・・・。そうすると、自然や他の生き物との関係が新たに築けるかもしれない。

パリの街路では、昼間、路上のカフェで長々とおしゃべりしていた人たちを目にした。あいつらは、仕事をいつしているのか?と、ついつい思ってしまった。でも、こうも考えられる。あくせくしなくても、生きていけるのだ。成長拡大発展による金銭によるよき暮らしという価値観にとらわれることを止めれば、それなりの人生を送れるだけの社会的富の中に彼らはいるということになる。そして、私たちも、このような社会にいる。

浪費の絶頂にいる日本の正規雇用の労働者たちは、そして先進国や先進地の労働者たちは、雇用の確保と賃金上昇ということを、最優先にしてはならないであろう。これでは、資本の網に絡め取られることになる。

小噺を二つ、

①「犬」 この家の人たちは、餌もくれるし、愛してもくれる。気持ちのいい住まいも提供してくれる。きっと、この家の人たちは、神様に違いない。

②「猫」 この家の人たちは、餌もくれるし、愛してもくれる。気持ちのいい住まいも提供してくれる。きっと、自分は、神様に違いない。

猫や犬を人間に、そして神を人間には簡単には思い通りにならない自然や大地や社会関係、このような諸々の関係性と置き換えて考えると、・・・。私たちは、犬と猫のどちらの立場でいるのが幸せなのであろうか。私たちは、自分を神として自然を統括するものとしての存在ではないことに気付く。でも、この意識を多くの人が抱くには、残念ながら、幾度かのきわめて大変な厳しい状況を経験することが必要となろう。

カントはどこかで書いている。

> それを考えることしばしばであり、かつ長きに及ぶにしたがい、常に新たなるいやますます感嘆と畏敬とをもって心を充たすものが二つある。我が上なる①星しげき空と②我が内なる道徳法則がそれである。『実践理性批判』

＊①と②の番号は、整理のために私が付けた。

夏の夜、テレビから離れて、室内から出てぼんやり夜空を眺める。眼前には広大な暗闇が広がっている。見上げると、たくさんの星が小さく輝いている。チラチラ消える星屑たちを観る。ふと、自分が今までとは違った世界にいることに気付く。私たちは、この世界では、この天地の中の消えそうな一点でしかないという寂しさらしきものを感じる。私たちの小ささを、嫌でも意識する。この自然の前では私たちは小さな存在である。こう思うと、この自然に頭を垂れることとなる。この意識を、私たちは失ってはならないであろう。

でも、このようなちっぽけな私たちは、この大自然を貫く因果関係を少しずつ把握することをしてきた歴史がある。これも、認めようではないか。

カントはさらに、別の所で、次のようにも書いている。

> 人間が人間たちのなかにいると、ただちに妬み、支配欲、所有欲、それにこれらと結びつく敵対的な傾向などが、それ自体では満ち足りている彼の本性を責め立てる。・・・たがいに道徳的素質を腐敗させ合い悪くしあうには、人間たちがそこにいて、彼を取り囲んでいるというだけで、そしてそれが人間だというだけで十分なのである。
> 『単なる理性の限界内の宗教』(1793 年 69 歳)

カントも、人間には、どうにもならない根源悪が存在するとしている。人は集団の中でいるだけで、その人がそもそも悪人でなくても、たがいの道徳的に善く生きようとする素質をダメにしてしまうと書いている。私たちには、人間であるがゆえに発生してしまう根源的な悪があることを、認識しなくてはならない。人は群れをなして社会を形成しているので、そこでは、どうしても争いが生じてしまう。小さな集団内でも、人は他との比較をしてしまい、競争心等をもってしまう。生存や性への要求は、自己への愛を、他を払いのけても獲得しようとしてしまう。このような欲求は、それ自体、悪いものではない。しかし、そのためには、カントのいう普遍的な道徳法則に反することもしてしまうという弱さを生じてしまう。では、何故、であろうか。

それは、人間には自分自身によって自分を規定していくという意志の自由を行使することができるためであるようだ。また、誰もが自分の人生を幸福にしたいと思っているのだが、その人なりのはっきりした幸福についての考えをもっていないために、自分と他人を比較してしまう。他の人をうらやましく思う時、自分は不幸であるとして、どうしても邪な思いを抱いてしまう。悪をなさないようにでき得る可能性があるかにもかかわらずしてしまうから、これは人間にとって根源悪なのであろう。意志の自由に基づいて善をなすことができる可能性があるのに、悪をなしてしまう。現状では、私たちの歴史と社会をこう解釈するしかないであろう。

また、このような根源的な悪の原因を個々人の内に、人間と言う生き物の中に明確にその場所を特定できない。そのために、特効薬がないことに

なる。この根源悪をやっつけてしまうことができない。人間はどうにもならない悪をいつも抱え込んでいることになる。

でも、私たちは道徳法則をみずから立法できる存在でもある。根源的な悪を抱えているために、たびたび社会的にマイナス体験をしてしまうが、そのたびに、反省して自らを律することができるという可能性ももっている。私たちは、ちっぽけな存在ながらも、その生きている意味を考えてきた歴史がある。私たちには、確かに、カントのいう道徳法則を個人的には意識することはできるし、このように行為している。

このようなマイナス体験によって生じた反省に基づいた道徳律を自覚して、その後の人生で、人々を幸せにする社会や文化を造り出そうとすることもできよう。私たちは自分の行ってきた過去の行為に対して「やましさ」を感じたり、後悔の気持ちになったことがあるはずである。この心は、「マイナス体験」として抱かれている「道徳法則への尊敬の念」そのものではなかろうか。この意識は、拒み様のないリアリティをもって私たちに迫ってくる。後悔の念は、時間がたっても、時として、強く迫ってくることがある。この後悔の思いに心深くとらわれて、日々反省するのが私達である。煩悩具足の凡夫である私たちは、この思いがあるからこそ、自らの行為を律することができているのではなかろうか。このようなことを通して、人を自発性をもった主体的存在＊として対応しようとすることができるのだ。

このように、理念としての「自由」が虚構としてではなくして、現実に作用する一つの因果性として確実に現れ出ることは間違いないことである。「道徳法則への尊敬の念」として、・・・。このように、超時間性のある理性に起点(根拠)をもつ道徳が法則として現実の時間と空間(感性)の中に入って、立派に作用する。この超時間的な根拠こそ、自ら決断して新しく始める「自由」にほかならない。結果をもたらすのであるから、「自由」にはリアリティがある。これが、決定根拠のある「自由」である。

でも、「道徳法則への尊敬の念」が、積極的な「プラス体験」として現れ出ることは、なかなか難しい。やましい心がまったくない、打算のまったくない実践は、なかなか現れにくいであろうが、・・・。これが、煩悩具足の凡夫である私たちの実際の日々の姿であろう。愚かな過ちを繰り返しながら、そのたびに「道徳法則への尊敬の念」に立ち戻ることで、私たちは自分のため、人のためになる行為をなすことができるようになるのであろう。

農民は近欲で、保守的で、他の人と連帯しようということがはなはだ薄い。社会の変化・進歩にブレーキをかける存在ではある。今まで述べたような人間の持っている根源的な悪の要素をあまりにもはっきりさせる人たちではあるが、今まで述べたことは、人間の弱さを自覚した上で、それを克服するために理性が選択するであろう長期的な戦略として示していると言えよう。だから、「縮小社会」の実現に向けて、私たちは諸活動をすることができるのであり、この活動に意味があることになる。

＊自発性をもった主体的存在?

こう書いたが、これも、実は、その人の位置しているそれまでの社会的諸関係、関係性の網の中での結果として現れてくるものであるから、物事の出発点そのものではない。だから、この主体は、特別な決意性をもって現れ出ている者ではない。誤解を招かないために、蛇足とは思いつつ・・・。

補説2　労働の在り方の現状認識と縮小社会での働き方の像の研究を!

＊以下の文章は、岩波書店『自由への問い⑥労働―働くことの自由と制度―』佐藤俊樹責任編集の中の、「現代の〈労働・仕事・活動　ハンナ・アーレントの余白から」(佐藤俊樹　執筆)を参考にまとめている。

―「労働」・「仕事」・「活動」の視点から―

ハンナ・アーレント(1906-1975 年ドイツ出身のユダヤ人)の人間の営みの三分類を導きの糸として、考えていきたい。アーレントは、①「労働 labor」と②「仕事 work」と③「活動 action」の三類型を提示している。＊以下の「引用」は、『人間の条件』から

①「労働 labor」とは、私たちの生命を維持していく諸活動である。この生産「労働」とは消費と結びつく労働のことである。だから、その労働の産物としては、消費活動の後に、その残骸物はない。生物としての生命の循環、自然の営みの諸過程である。

「労働とは、・・・労働によって作り出され、生活の過程の中へ送り出される生物的な必要物に拘束されている。」
②「仕事 work」には、仕事をするという意味とともに、作品という意味もある。まあ、言い換えると、耐久性のある物・事を、働くことによって成果として残す諸活動のことである。制作物、作品は、その製作者の死後も生き残り、そしてそれが人々の共有物となり、この世の継続性を指し示す物・事となる。この世から去らねばならない必然性をもっている人間の記憶を受け継ぎ、人間世界にその痕跡を残す働きのことである。
「人間存在の非自然性に対応する営みである。・・・仕事はあらゆる自然環境とは異なる物の「人工的」世界を作り出す。・・・仕事の人間的条件は世界性である。」
具体的には、専門的技能をもった職人のような仕事であろう。そして、このことを通して、人間独自の世界を作り出すようなものであるとも言える。だから、専門職とともに、管理的部門の仕事もここに含まれるであろう。だから、このような職につく人の多くは、「労働」をしている人たちとは異なる働き方や生き方をしている。その他では、学者や教師、そして評論家やメディアの正社員もあてはまろう。
③「活動 action」とは、人と人との間で行われる言動や共同的な行動のことであり、社会的行動のことである。これは、自分以外の他者を必要とするものである。「活動」は、社会と孤立して生きているのではなくして、群れをなして社会を形成している人たちのなすことである。言葉と行為によって人は人間世界の網の目の中で生きることで、自分がどのような存在であるかを自覚させられるものである。自分が何者であるかは、他の人たちに見られ聞かれることで現れ出るものである。
「活動とは、物や事の介在なしに人々の間で直接なされる唯一の営みである。多数性という人間の条件、すなわち地上に生き世界に住むのが一人の人間ではなく、人々であるという事実に対応している。」
これは、公共的なことをしている営みのことを意味しているようだ。政治活動や非営利団体であるNGO や NPO 等でしていること、そして湯浅誠氏のような社会活動家のしていることがあてはまるであろう。

アーレントのこのような区別は、働く人を労働者という枠にはめてしまうことに対する批判である。また、マルクス主義の言うような、人間を労働力商品として一括りにすることへの批判でもある。つまり、私たちの営みには、「労働」という言葉でまとめてしまうことのできない「仕事」や「活動」という分野もあることを指摘している。この異質さを踏まえて、論議すべきであろうと思われる。

産業革命以後、人々の働く姿とその意味は、大きく変化した。作業場に機械が入り、多くの人たちは労働者として、労働力商品として資本家たちに雇用された。それまでの職人としての営みは、次々と制限され消滅してきた歴史がある。そして、特に近年コンピュータ化の進展で、変化が急激に生じてきた。そのため、知識に関わる専門職と制度に関わる管理部門の人たちが労働人口の中で一定の割合を占めてきた。それまで事務職がしていたようなことが情報機器(パソコン)に代替えされ、専門職や管理部門職、そして現場の労働者が自分でするようにもなってきた。そのため、オフィスや工場でも、「仕事」的に働く少数の管理部門職や専門職と、その他の「労働」をする多数の者に二分化され、「労働」は質の劣った働き方として、「仕事」は質の高い働き方として位置づけられている。つまり、序列化されているのだ。
現代社会では「仕事」的な労働が最も重視されているだが、この労働をするには、ある一定以上の文化水準や教育レベルが必要である。そのため、「労働」と「仕事」をしている人たちの間では、抱いている社会像や自分の将来像も異なっている。このようなことが、先に書いた現代社会における「能力差」として意識されている。
「労働」が提供する商品やサービスは、他の人たちによって消費される。そのため、働き方は、他の人の需要の動向に大きく左右されている。それに合わせるしかない。 そのために、一生懸命働いても、その「労働」が自己実現ということにはなりにくい実態にいる。そのため、消費活動に夢を託すこととなる。働き過ぎと浪費の悪循環となって現れ出てくることになりかねない。

それに対して、「仕事」が提供する商品やサービスは、知識や制度なので、消費され尽くすことはない。働き方は、他の人たちの需要の短期的な動向には左右されにくい。長期的視野で商品やサービスを提供するのが、「仕事」の在り方であろう。だから、独自の創造性が要求される。つまり、「仕事」の内容について一番正確な判断ができるのは、この成果を受け取る側ではなく、専門知識と総合的視野をもっている本人となる。だから、部分的間接的ではあるが、自己決定できる領域がある。そして、雇用の安定という流動性を下げた方が、より成果が期待できる。

「労働」には、働く/働かないという自己決定ができるが、働き方では他の人の評価や指示に従うこととなる。そのため、雇用の安定性が「仕事」に比べて薄い。首切りの対象者となりやすい。

問題はこの「労働」と「仕事」が序列化されていることであろうが、この間の移動が容易であれば大きな問題とはならないが、それが難しいのが現実である。社会階層とその移動の調査を観ると、「仕事」につける比率は、家庭の文化度、親の教育度(学歴)によって大きく異なっているのが実態である。日本社会は、このような職業選択の機会の平等が保障されていないのだ。そのため、報酬と雇用条件で大きな差ができてしまい、大きな問題となっている。そして、「労働」と「仕事」の間にある中間地帯にいる労働人口が減ってきているので、この差をさも客観的な「能力差」として、「勝ち組」と「負け組」として分けられているのが現状であろう。

さて、農業の専門家としてそれなりに自覚している者は、日々の生産労働で経験と熟練深めて独自の創造性を発揮して「仕事」をしていることになり、日々の労働が自らの成長につながっていると言えよう。

しかし、日々の具体的農業「労働」は天候と消費者の動向に、決定的に左右されている。だから、農業という人間の営みは、「労働」であろう。この営みは、先に書いたように受苦的要素が強い。このことを承認した上で、「仕事」としての農業労働を目指さなくてはならないが、それには社会総体の在り方が変わらなくてはならないであろう。

＊「労働」と「仕事」が序列化されていることを指摘したが、「仕事」をしている人たちの問題点については触れていなかった。実は、この「仕事」的なことをしている人たちには、大きな問題がある。彼らには、大きな落とし穴がある。

大きな会社で専門的な仕事に従事していたり、公務員として働いている人たちは、一つの組織に異常な熱意で所属していることである。そのために、人格が単一化してしまうことである。会社の倒産、定年、失職等のために人格崩壊や生きるエネルギーがなくなってしまうことがあるが、これは、それまでに作られていた対人関係が、自分が何者であるかを保証してくれる他者が一か所に固まっていて、一つの価値観で統一され評価されているためである。そのために、そこがなくなると自分が社会的にゼロとなってしまうことになりかねない。

定年退職した後は趣味の生活を、なんて言ってもそれは無理な事である。その趣味の生活でも、それができ得る人間関係がなくてはならない。そうでないと、これからは、老人性のうつ病の人がたくさん出てくることになりかねない。40 歳台、50 歳台から、仕事以外のことに、ある程度の時間とエネルギーをつかうこと、いろんな集団内での人間関係に帰属する努力が必要となるであろう。そうしないと、その後の人生に大きな差ができてしまうことになる。

そのためには、複数の関係性を作り出す努力を、若い時からしなくてはならない。複数の集団に、それぞれ違う役割で所属することでしか、自立的思考なんてできないと言えよう。ここでは責任を取るつもりで行動し、あそこでは人の後からついていけばよいというような多様な関係性を経験し、いろいろな集団に同時に所属していないと、自分の社会的な人格の多様性は、理解できないであろう。